

コロナ禍における統合科目の教育実践

著者	賀数 いづみ
雑誌名	沖縄県立看護大学教育実践紀要
巻	8
号	1
ページ	24-24
発行年	2022-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1757/00000415/

教育上の課題と工夫

ここでは教務委員長を科目責任として助教以上の教員が担当する統合科目について述べる。令和3年度は前年度の経験から、対面・遠隔教育のハイブリッド方式で準備対応を想定した。卒業演習は3回の筆記試験と1回の技術試験から構成される。まず、筆記試験の第1回目は前年度同様に5月、2回目、3回目は例年通り9月と12月に実施した。9月は緊急事態宣言下であったため、遠隔での試験となった。公正な実施に向けて試験監督教員がZoom画面を観察、学生は試験中、Zoom画面のビデオをONにしてFormsに回答する方式とした。特にトラブルなく試験の実施ができた。12月は対面試験を実施し、事前の体調管理、検温、マスク着用、入室時の手指消毒、黙食などの基本的感染対策の徹底により、トラブルなく終了した。

技術試験は、試験課題を統一して実施した前年度の方法にするか、コロナ禍以前の領域別の課題試験とするか、ぎりぎりまで教務委員会で議論を重ねた結果、課題統一により試験終了時間を統一できることから、試験課題を統一しての実施とした。技術試験課題のシナリオや試験会場の設定は、4年次のレディネスや前年度学生からの意見を活かし、改善した。実施時期が7月末であるため、感染対策及び暑さ対策の観点から学生を2グループに分けて集合時間を変更して、試験終了後の拘束時間の短縮を図る工夫をした。また、暑い廊下での誘導係や待機室の担当教員も前半・後半の交代制に一部変更するなど、教員の拘束時間を短縮する工夫も行った。技術試験をトラブルなく円滑に終えることができたのは、前年度の検討経緯をふまえて対面試験実施に向けて準備及び当日の運営に尽力した関係者、そして4年生の感染対策の徹底によるものである。コロナ禍前の領域別課題による技術試験の実施ができなかった課題も残るが、学生の拘束時間の短縮などの柔軟な対応は今後の実施に活かすことができると考える。

看護統合実習はコロナの新規陽性者数が落ち着いた時期であったこともあり、実習時間や期間の制限の調整及び実習施設の新規開拓により全員、臨地実習ができた。施設によっては新型コロナワクチンの接種、実習開始前のPCR検査の陰性確認、実習前2週間の健康観察と行動観察、実習期間中の毎日の健康観察などが条件とされた。

看護卒業論文/看護総合演習は、看護統合実習の経験を通し、事例や課題への取組等について元文献を活用し、看護実践を振り返る。今年度は学生全員が看護統合実習の実体験を通して、論文にまとめることができた。また、前年度と同様に対面・遠隔のハイブリッドで学習成果発表会を開催し、例年より施設から多くの参加を得たが、3年次の参加者数はあまり増えていないのが課題である。

With コロナに向けて

コロナ禍での統合科目の課題や工夫は、今後の教育改善に活かせることが多くあると考える。従来、当然のように学生の拘束時間を決めていたが、方法論の工夫によって学生の拘束時間の短縮ができたことから、多様で柔軟な教育方法の実践は、新たな教育の質の向上につながると期待する。
